

## めくるめく好奇心の足跡

沼野恭子著

『ロシア万華鏡——社会・文学・芸術』

五柳書院、2020年3月

「ねえ面白そうじゃない？」——2009年4月に沼野恭子氏の同僚となって以来、いったい何度この言葉が彼女の口から発せられるのを聞いたことだろう。「面白そう」な対象は実に様々で、何かのイベントだったり、人だったり、本や映画や音楽だったり、場所だったりする（対象が食や酒である場合は、「ねえ美味しそうじゃない？」というバリエーションもある）。ええそうですね、と同意するや否や、気づくとその「面白そう」なことに巻き込まれている（あるいは、その「美味しそう」なものを一緒に口にしている）。そして驚いたことに、大抵の場合それは本当に「面白い」——食や酒なら、100パーセントの確率で「美味しい」——のである。

本書は、2006年から10年余にわたって沼野氏が様々な媒体に折々に綴ってきた文章をまとめた一冊である。その対象は実に幅広い。「本職」である文学や翻訳論はもちろんのこと、食文化、服飾文化、映画、絵画、音楽などなど、凡そ「ロシア文化」の範疇に入るものは全て網羅し尽くしているような印象すらある。そのめくるめく「万華鏡」のような執筆活動の土台となっているのは、しなやかにして尽きることのない持ち前の好奇心と、フットワークの軽さだ。

それが一番よくわかるのは、「第一章 社会編」だろう。専門とするフィールドであるロシアはもとより、中央アジアのタシケントやヌクス、あるいはボローニャやニューヨークやベオグラードから自宅台所に至るまで、舞台となる場所は多岐にわたるが、一貫して変わらないのは、ありとあらゆる対象を先入観なく「面白がる」無尽蔵の好奇心と、思い立ったらすぐ行動に移す思い切りの良さ、そして、行く先々で出会った事物や人々や風景を丁寧なすくいにとってゆく柔らかな眼差しである。

「思い立ったら即行動」の一例として挙げられるのは、「二二のpromenade」（2016年7月から12月まで日本経済新聞のコラム「promenade」に連載されていた随想集）の中的一篇「モスクワのシャーマン」（20-22頁）だろう。何を隠そう、ここに書かれたモスクワの文学カフェでのライブパフォーマンスには私も同席していた。この「シャーマン」を名乗るユニークなアーティストのライブ情報は、確か現地の情報誌の端っこに小さく載っていたのだが、ほんの数行のその記事を目ざとく見つけた彼女は、いつものように目をキラキラさせながら私をつかまえてこうやってきたのだった——「ねえ面白そうじゃない？」疑問文の形式をとりつつ、実際には「一緒に行きましょう」もしくは「私についてきなさい」という命令文を意味するこのフレーズが口にされると、あとはそれを実行するのみである。あっという間にスケジュールが調整され、気がつくとも私たちは薄暗いカフェに座り、怪し



げで魅惑的なパフォーマンスに見入っていた。おそらく私一人だけだったら、こんなにワクワクするような体験はできなかつたろう。沼野恭子のキラフレーズ——「ねえ面白そうじゃない？」——は、いつもどこか、それまで知らなかった心躍る世界へと、周囲の人々と読者を連れて行ってくれる。

「モスクワのモグラ・カルチャー」(62-66頁)では、モスクワの地下にあるクラブや博物館やカフェを巡り歩いた様子が描かれている。私もこうした場所を探し歩いた経験があるのでわかるが、ロシアのアンガラ文化に関わる店やミュージアムは、時にものすごくわかりにくいところにある。なかなか入り口が見つからずにあきらめることも珍しくない。だが、フットワークの軽さとは裏腹に、案外(?)しぶとく粘り強い人でもある沼野氏は、あちらこちらを彷徨いつつも、最後にはお目当ての場所にたどり着く。モスクワのアンガラ文化を楽しむには「モグラ的な嗅覚と、看板がなくてもめげない根性と、重いドアを思いきりよく開ける腕力が必要」(66頁)だという締めくくりの一文は、「面白そう」なものを嗅ぎつけ、度胸と行動力で実際にそれを楽しむ経験を重ねてきた人だからこそその説得力にあふれている。

「面白そう」なことは、なにもモスクワのアンガラ・カフェだけにあるわけではない。夫婦間のカルチャーギャップをユーモラスに写し取ったエッセイ「身近な異文化摩擦」(56-58頁)は、ささやかな日常の一場面の中にふと生まれる面白さを見逃さない。「羅臼のホッケ」を「ラオスのホッケ」と空耳するエピソードは、何度読んでも抱腹絶倒である(東京外国語大学に勤務する人間にとっては羅臼よりもラオスの方が心理的に近い地名なのかもしれないが、思わず脱力してしまうようなこの手の天然ボケのエピソードは、実は日頃から枚挙に暇がないということをおのづかやをこの場を借りて付言しておく)。

「第二章 文学編」は、訳書のあとがきや書評、現代ロシア文学を扱った文章を収録したパートで、ここがいわば沼野氏の「本職」にあたる部分と言えよう。ここでも、街を歩き、日常を観察する時と同じ「嗅覚」の鋭さが目を引く。これまで氏が翻訳してきた現代ロシア作家たちの数々を改めて見直してみると、そのラインナップそれ自体が現代ロシア文学の一つの景観を切りとったものとなっていることに気づく。リュドミラ・ウリツカヤやリュドミラ・ペトルシェフスカヤは、100年後にロシア文学史が書かれる時には「ソ連崩壊後のロシア文学」の章にまず間違いなく名前が載るはずの重要作家だし、一方で、新世代のホープともいべきアンナ・スタロビネツや、幻の作家レオニード・ツィプキンにいち早く目を留める慧眼には舌を巻く。現代作家だけではなく、ドストエフスキーやオブローモフ、トゥルゲーネフなど19世紀の文豪たちも登場するが、文学史的な位置づけや知名度にかかわらず、どの作家に対しても等しく新鮮な眼差しで向き合っているのが印象的だ。きっとこの人は、本が大好きだった少女の頃も、ロシア文学の魅力に目覚めた学生時代も、研究者となってからも、常に変わることなく好奇心いっぱい、作品の一つ一つを面白がり、自分が面白いと感じるものを自分の足で追いかけ続けてきたのだろう。そしてモスクワのシャーマン・ライブの時の私のように、気がつくと読者もいつの間にか沼野ワールドに引き込まれている。

ところで文学に関しても、「看板がなくてもめげない根性と、重いドアを思いきりよく開ける腕力」がいかに発揮されていることも指摘しておきたい。「チェルノブイリか

らフクシマへ「アレクシエーヴィチの祈り」(216-232頁)に記されているように、2011年3月に東日本大震災が起こった直後、沼野氏はロシアの作家や知識人たちから被災者に宛てたメッセージを自身のブログに露和对訳で掲載していた。その際、『チェルノブイリの祈り』『戦争は女の顔をしていない』などの鮮烈なドキュメンタリー文学で知られるベラルーシのロシア語作家スヴェトラナ・アレクシエーヴィチにも声をかけ、長文のメッセージを受け取ることができたのだ。後にノーベル文学賞を受賞(2015年)することになるアレクシエーヴィチは、当時すでに広く名の知られた作家だったが、まだ面識のなかった彼女にも臆することなく知人を通じてコンタクトを取り、ほとんどエッセイと言っているほどまとまった分量の文章をこの多忙な作家に書かせてしまう(しかも無報酬で!)その熱意と力技はおそろしである(本書の中では触れられていないが、ノーベル賞を受賞後、世界中から講演や執筆依頼で引っ張りだことなっていたアレクシエーヴィチに粘り強くアプローチを続け、2016年に本学での講演会を実現させたのも、沼野氏の「重いドアを開ける腕力」の真骨頂であった)。

「第三章 芸術編」で扱われるのは、美術、映画、服飾文化、音楽である。この射程の広さは、沼野氏の好奇心が辿ってきた足跡をそのまま映し出している。もちろん、美術や映画に関しては氏の専門ではなく、あくまで一般向けの解説やエッセー的な文章ではあるのだが、たとえば現代ロシアを描いた映画の登場人物に、ロシア民話の登場人物バーバ・ヤガーを重ね合わせるという思いがけない解釈は、専門分野を横断して探究を続けてきた沼野氏ならではのものであろう(『この道は母へとつづく』アンドレイ・クラフチュク監督)343-346頁)。また、帝政末期からソ連時代にかけて活躍したファッション・デザイナーであるナジェージュダ・ラーマノワの変遷を、「身体性」と「記号性」という二重の機能を持つ「衣服の二重性」という視点から読み解き、ジャポニズムやアヴァンギャルド芸術家たちとの交差を立体的に描き出した論考「衣服の二重性 ラーマノワの挑戦」(301-342頁)は、(もしかすると本人は全く意識していないかもしれないが)かつて沼野氏が駆け出しの文学研究者だった頃に取り組んでいた同時代の作家ボリス・ピリニャーク研究からつながるものでもある。好奇心の赴くままにあちらこちらのドアを開け続けてきたその足取りは、いつしか有機的に結びつき、広い視野と対象への奥行きのあるアプローチを創出している。



思えば『ロシア万華鏡』というタイトルは、これ以上ないほど本書に似つかわしいと言えるだろう。万華鏡の中では、多種多様なオブジェクトが幾重にも反射し、複雑なパターンが映し出される。一つ一つは断片的な図形だが、それらが絡み合っただけで偶然の模様が生まれ、一つのスコープの中に収まって色とりどりの世界を形作る。本書の一つ一つのエッセイや論考は、まさに万華鏡のオブジェクトのように組み合わせたり、「ねえ面白そうじゃない?」と読者をいざなうのである。

(前田和泉)